

ある。詩全篇に敷衍して考察すると、十句毎に二十段に区切ることで見事に、構成の統一がはかられていることが、先の具体的詩句の例示で実証できたと思う。

つまり、この構成一つをとっても徹底的にその統一性にこだわる道真の性向とも換言できるものを指摘できるように思う。道真の美意識がそこから垣間見られるのである。

そして、この作品の構成を考える時、見逃してはならないのは、「季節の推移」を基軸としていることである。「春」から「初夏」「梅雨」「盛夏」「残暑」「初秋」「仲秋」という、京から太宰の地に我が身を移しながら、その我が身の周辺の事を季節の推移に触発されながら詠っているという一貫した詠作姿勢を押さえておく必要がある。一見、道真の心情、あるいは志向するものが、その時々によって大きく変わっていく様が、そこに詠作上の一貫性を欠く詠みぶりの証左とも考えられるが、これを「季節の推移」を基軸として、とらえ直すとその季節感が読者に共有されていれば道真の心情の変化が無理なく読み手に伝わるということが理解できるのである。

二二

〔出典の分析（その一）〕表層部分の投影考察〕

この章では、「敘意一百韻」の注釈を複数回に分けて公にして来たもの(注2)を、「出典の考察」に絞り、論を進める。

ここでは「敘意一百韻」の詩句に道真自身が中国古典籍からの引用を明言しているもの、あるいは、それを明確に指摘できるものに特定して主なもの以下に例示した。